

## 新島 襄の言葉

本井 康博（同志社社史資料室）

「君等宜しく改革家となりて  
此不潔なる天下を一掃し賜へ」

新島書簡の一節（『新島襄全集』Ⅳ、一三三二頁）。新島の「金言」は不思議と学生か、若い卒業生への書簡に目立つ。これも「良心碑」の碑文同様、学生の古賀鶴次郎宛て書簡である。

新島が言う「改革家」は、「真之文化」を目指す精神的な改革者を指す。「今や満天下腐敗矣」である（同前）。「人心之改革なくして物質上之改革なんする者ぞ」であった（同前Ⅲ、四六三頁）。

新島から見ても、当時の「英雄」とか「豪傑」はことごとく「肉食動物」、いや「腐水の蛆虫」であった。「縁の下力持ち」を永年しなければ国は救われない、と彼は学生たちに説いた（拙稿「新島襄と大久保真次郎」九三～九四頁、『新島研究』七八、一九九一年）。「情欲の囚人」から「真理の囚人」へと脱皮せよ、とも勧めてやまなかった。

ちなみに新島は自分を訪ねてきた佐々城豊寿（日本基督教婦人矯風会書記）に対しても、「断然世の革命者と成られよ、否世の改革者と成りて働かれたし」と切望した（池本吉治編『新嶋先生就眠始末』七八～七九頁、警醒社、一八九〇年）。女性への期待も大きかった。

君等宜しく改革家となりて  
此不潔なる天下を一掃し賜へ